



B&G

# 子ども第三の居場所

-----



# 「子ども第三の居場所」事業概要

## 「子ども第三の居場所」とB&G財団

B&G財団は、1973年の設立以来40余年にわたり、海洋性レクリエーションを主とした自然体験活動を通じ、青少年の健全育成を推進してまいりました。また、全国466カ所に建設した海洋センターや所在市町村、279カ所に設立した海洋クラブと連携および協力し、地域住民の心身の健康づくりを目的とした各種事業を実施しております。2018年より、日本財団と連携し、本事業「子ども第三の居場所」に着手しました。



## 子どもたちに寄り添った支援をあなたのまちで

手厚い支援を  
必要としている子どもが  
放課後児童クラブを  
利用している

既存の事業の  
拡充を考えている

子どもたちに  
学校でもない、家でもない、  
塾でもない居場所を

子ども  
第三の  
居場所

## 「子ども第三の居場所」とは？

学校でもない、家庭でもない、塾でもない、子どもたちが安心して過ごすことができる居場所です。信頼できる大人の存在を身近に感じ、拠点に通う仲間と時間を過ごすことができ、5つの機会を通して、生き抜く力が育まれます。



### 1 安心・安全な場所



### 2 食事提供 (学習・生活支援モデルは任意)



### 3 基本的な 生活習慣を整える



### 4 学習習慣を 定着させる



### 5 「子ども第三の居場所」だからこそできる体験活動



拠点を利用する子どもたちに手厚い支援ができることが魅力です。

概要

支援

相関図

インタビュー

活動紹介

関係者の声



# 生き抜く力を育む支援

「子ども第三の居場所」では、拠点を利用する子どもたちが、社会へ羽ばたく“その時”を見据えながら、5つの機会を提供し、子どもたちの自立に向けて、手厚い支援をしています。

## 認知能力 (学力)



## 非認知能力(自己肯定感、人や社会とのかかわる力)



## 基本的な生活習慣



概要

支援

関連図

インタビュー

活動紹介

関係者の声

## 「子ども第三の居場所」 ～B&G財団支援拠点 事業展開モデル～

### 【子ども第三の居場所を構成する4つの空間要素】



暮らす  
生活習慣の場。  
家庭での  
過ごし方を体験



すごす  
学習、遊びの場。  
他者との関わり方を  
体験



食べる  
食育の場。  
五感を使って食を  
体験



見守る  
子どもの様子を見守る場

### ●常設ケアモデル

【実施頻度】週5日以上(放課後の時間帯  
週25時間以上)

【スタッフ数】拠点マネージャー(フルタイム)  
1名以上ほか計4名以上

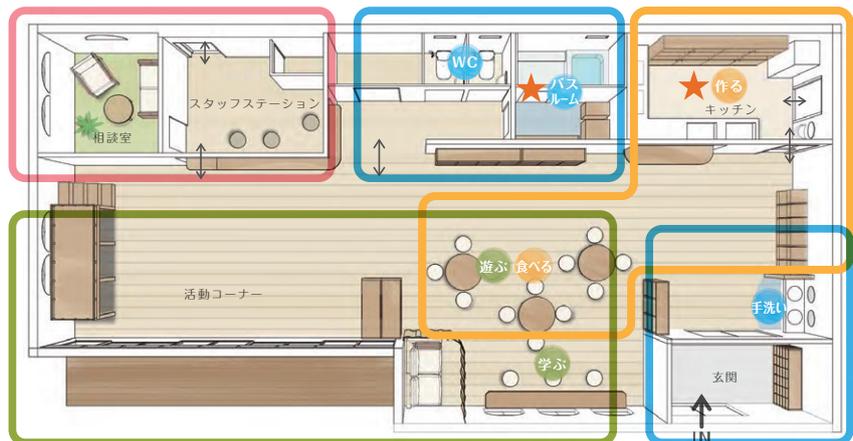
【支援内容】居場所提供、生活習慣形成、  
学習支援、食事提供、入浴支援

### ●学習・生活支援モデル

【実施頻度】週3～4日(放課後の時間帯  
週9時間以上)

【スタッフ数】拠点マネージャー(フルタイム)  
1名以上ほか計3名以上

【支援内容】居場所提供、学習支援、生活  
習慣形成



★常設ケアモデルは必須設備

# 3

## 拠点から拠点利用者(子どもたち)へ

### 海洋センターと連携した活動

初めてのこと、苦手なことにもチャレンジする力



### 食育

採って、作って、食べて  
苦手が好物と楽しい思い出に



### 外部講師を招いた習字教室

好きを見つけて特技に 文字も姿勢も美しく



### 学校訪問

居場所での顔 学校での顔  
多数の目で子どもを見守る

「子ども第三の居場所」のマネージャーやスタッフが授業参観へ参加、学校長や管理職、担任教員や教育委員会と協議を行うなど、お互いが良い相談相手となり、連携しながら子どもたちの成長を見守っています。

### 個別支援計画

“その子”にあわせた支援  
苦手と向き合い、良さを引き出す



氏名(〇〇〇〇) 学年(〇年生)

【めざす姿】 【年度終わり】

項目	4月・5月・6月の様子	7月・8月・9月の様子
①「強さ・たくましさ」に関するコメント		
②「喜び・感動」に関するコメント		
③「やさしさ・思いやり」に関するコメント		

概要

支援

相関図

インタビュー

活動紹介

関係者の声

# 4 B&G財団から拠点へ

## 拠点利用者向け支援

### オンラインイベントの実施

仲間が全国に～オンラインで全国の居場所をつなぐ～



企画課



### B&G 海洋体験ツアー

全国の仲間と夏休みの思い出を



## 自治体・拠点スタッフ向け支援

### スタッフ向け研修会

充実したサポート体制から  
充実した支援へつなげる



### e-ラーニング

拠点運営や支援のノウハウを学ぶ  
いつでもオンライン講座を受講することができ、運営資質の向上を図る



## 2021年はこのような支援も実施

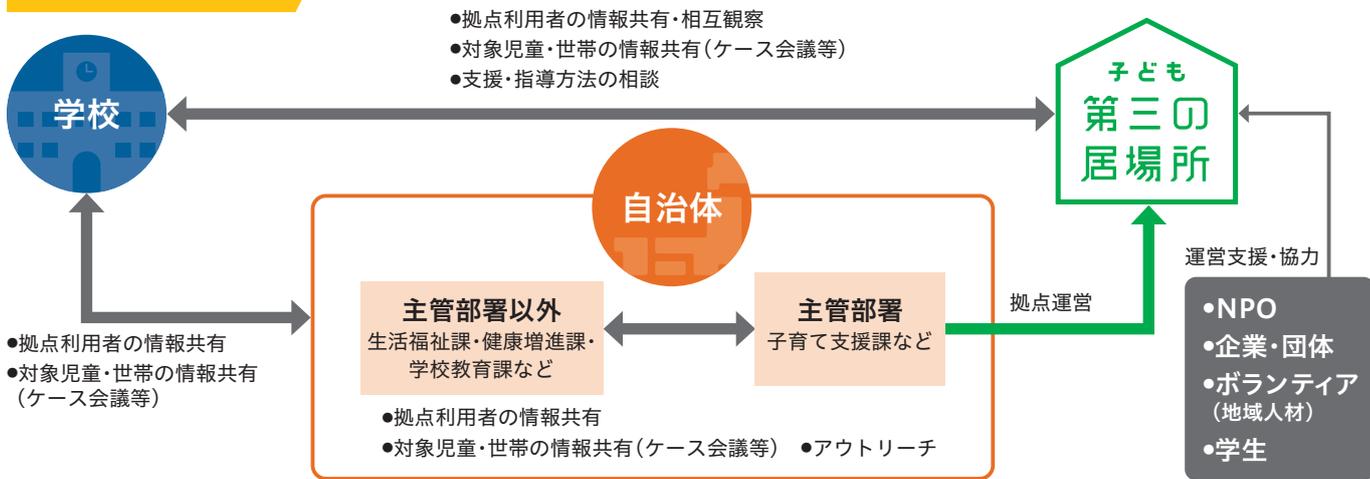
### ■スーパーバイザー支援

- 臨床心理士等の有識者(スーパーバイザー)より、拠点が抱える課題や悩みについて、アドバイスや解決に向けたサポートを受けられる制度
- オンラインでの個別相談や現地での研修を実施

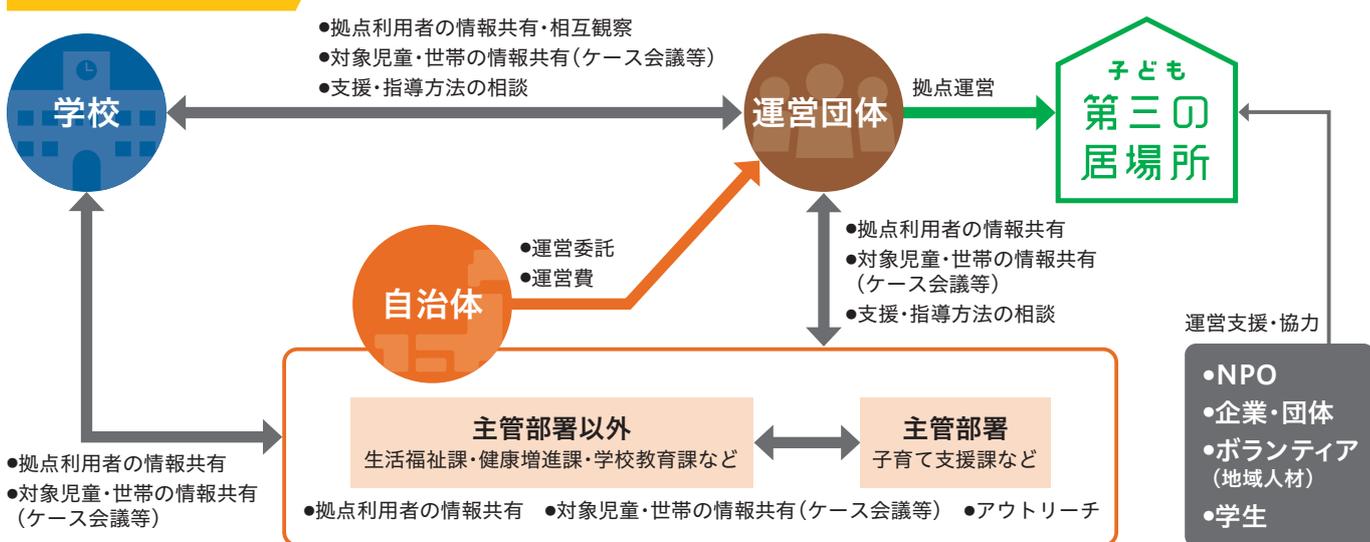
# 5 子ども第三の居場所 導入例

運営体制に分類して紹介します!

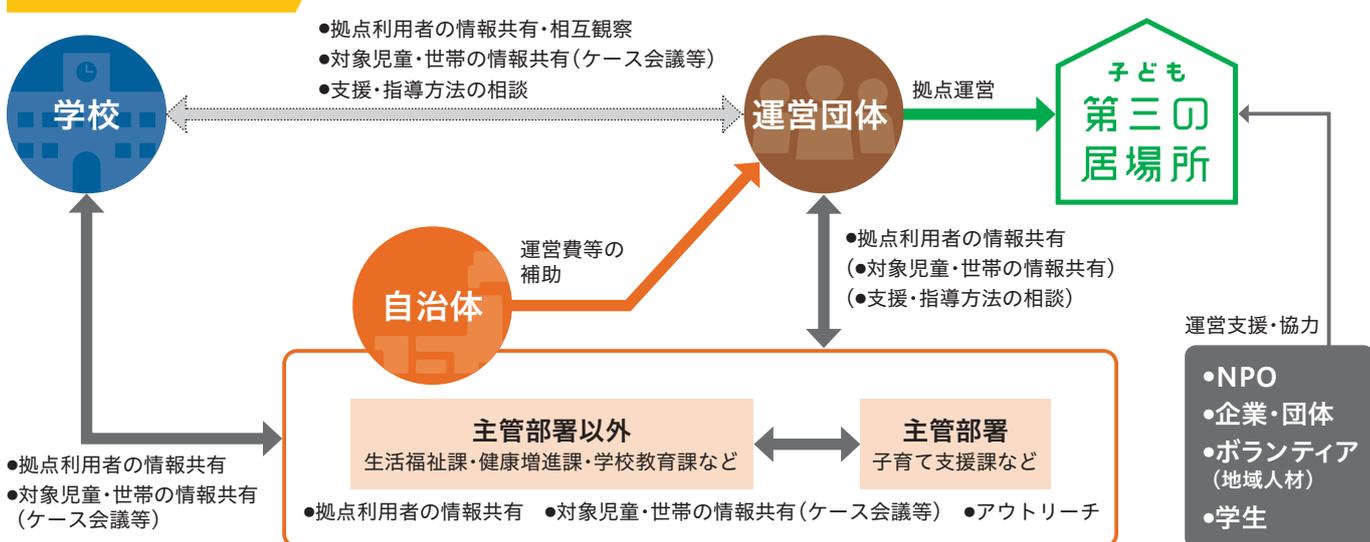
## 自治体直営型



## 運営委託型



## 補助事業型



概要

支援

相関図

インタビュー

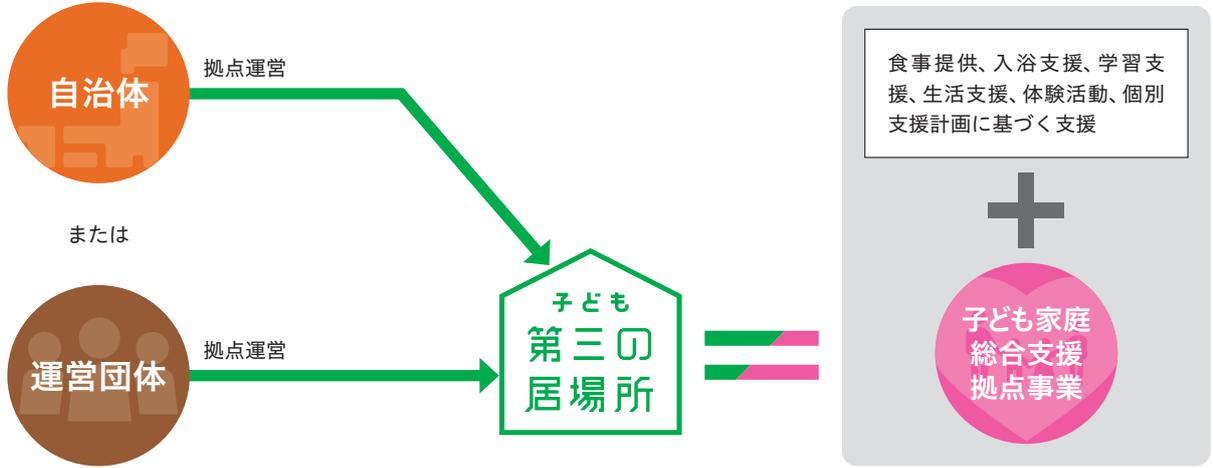
活動紹介

関係者の声

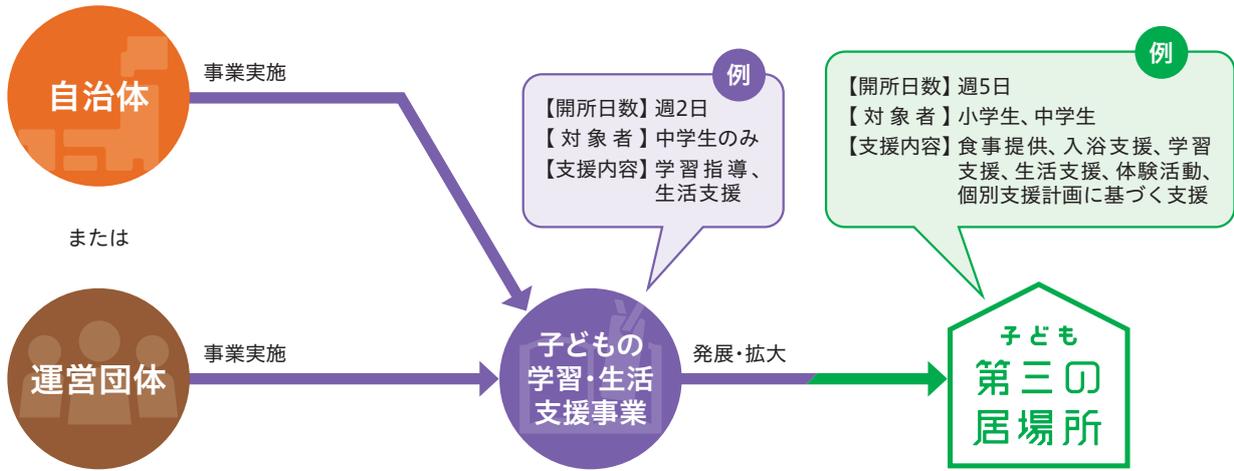
# 6 既存事業への導入例

地域の  
実情に応じて、  
支援の充実を  
図ることができる

## 子ども第三の居場所 × 子ども家庭総合支援拠点事業



## 子ども第三の居場所 × 子どもの学習・生活支援事業



## 子ども第三の居場所 × 放課後児童クラブ



「子ども第三の居場所」利用対象児童に対して、個別支援計画に基づく支援を実施

概要  
支援  
関連図  
インタビュー  
活動紹介  
関係者の声



# 市長に直撃インタビュー



大分県杵築市  
永松 悟 市長



## 杵築拠点

- 2019年4月オープン
- 平日16:00~21:00
- 食事提供あり
- 送迎あり(車両支援)

## Q1 | 実施のきっかけについて

**永松市長:** 祖父母の支援が受けられないひとり親家庭や遅くまで仕事をしている家庭、情緒的な課題が見られる子どもを抱える家庭について、これまでは保護者との関係づくりや関係機関での見守り、情報交換くらいしか具体的な対応が取れていませんでした。食事を含む居場所の提供、基本的生活習慣の定着、学習支援や体験活動の実施により、子どもたちに対して直接支援することができるのが「子ども第三の居場所」事業であり、子育ての課題解消に有効な手段であったことから募集に手を挙げました。



## Q2 | 成果について

**永松市長:** 拠点での催しにお招きいただくのですが、先日は、クリスマス会へ教育長や福祉事務所長とともに参加し、子どもたちと一緒に食事をしました。毎日学校に行けなかった子ども、拠点には来ることができるようになりました。自慢したいこと、今日楽しかったこと、色々なことを話したいけれど、聞いてくれる人がいなくて不安な子どもたちと、信頼関係を構築して、そういう不安を軽くしながら居場所づくりができています。

**BG:** 学校でも家庭でもない第三の居場所の役割を果たせているということですね。



**永松市長:** ほかに、自治体として支援の充実が図られていることが成果として挙げられるかと思います。というのは、運営スタッフは、市役所、社会福祉協議会と緊密な連携体制をとり、個別ケース会議にも出席してもらっています。関係者が家庭に入り、偏りやゆがみを早期に発見し、家庭に寄り添った支援が実現できています。また、状況が深刻化して地域では支えられなくなった時にも、その子や家族の記録があることで、効果的な支援体制が整えられます。家庭崩壊の防波堤、育児ストレス解消の側面もありますね。

## Q3 | 必要性について

**永松市長:** 子どもは、いきなり大人になるわけではなく、家庭や学校の中で日々、成長していきます。学校に行けない、家庭で関わりが持てないというような子どもたちを支え、育てていく社会が求められています。

**BG:** 「子ども第三の居場所」がその役割を果たすということでしょうか？

**永松市長:** はい。「子ども第三の居場所」はそのような子どもたちにとって、自立するための準備の場となっています。

## Q4 | 今後の運営に向けて

**永松市長:** 早期発見、早期支援の体制にさらに磨きをかけていきたいです。

**BG:** 現在も注力されていることを継続していきたいということですね。

**永松市長:** 財源を確保し、事業を継続していくことに加えて、市として総合相談窓口機能の充実、関係機関との連携、ネットワークの強化を行うことで支援体制を維持したいです。

**BG:** 拠点が一つの機関として機能することで、子どもを支える絶対数が増えていきますね。

**永松市長:** はい。そのためにも運営スタッフとの密な連携も大切にします。支援が必要な子どもをこの「子ども第三の居場所」につなげた後は、行政からもその後の様子を聴き、必要に応じて保護者と面談、ケース会議を行っていきます。「子ども第三の居場所」につないで終わりではなく、継続的に関わっていきます。今後も、私や教育長もこの拠点が行う催しなどに参加し、理解を深めながら、応援していきます。

# 8 拠点MGに直撃インタビュー



## 大町拠点

- 2019年6月オープン
- 平日14:00~21:00  
日曜日、祝日  
9:00~21:00
- 食事提供あり
- 送迎あり(車両支援)



長野県大町市  
甘利 直也 マネージャー

### Q1 | どんな子どもたちが拠点を利用していますか？

**甘利 MG:**家庭環境に何かしらの困難を抱えている子ども、学校で集団に馴染めない子ども、授業についていけず学校に行きたくない子どもが多いです。

**BG:**そんな子どもたちが拠点を知るきっかけは？

**甘利 MG:**学校から、自治体窓口の子育て支援課に相談があり、拠点を紹介してもらっています。



### Q2 | 支援をするうえで、心がけていることは？

**甘利 MG:**支援者の一方的な理想や価値観の押し付けにならないように常に意識しています。

**BG:**常識を押し付けない、ということですか？

**甘利 MG:**生活習慣が確立されていない子どもに、突然歯磨きや入浴を押し付けると息苦しくなってしまいます。少しずつでいいので習慣づけていくことが大切です。質と量がその子どもに適切かを判断して支援しています。

**BG:**それはどのように判断されているのでしょうか？

**甘利 MG:**利用開始の際に子どもから、これまでの経緯、家庭環境、特性など、聞き取りを実施します。その子に必要な支援を「個別支援計画」で定め、スタッフ全員で支援の方向性を統一しています。

### Q3 | 苦労したこと、難しかったことは？

**甘利 MG:**学校関係者の理解を得ることが一番難しかったですね。開所当時は、拠点を利用している子どもの支援会議を拠点で実施しようと声をかけましたが、参加してもらえなかったこともありました。

**BG:**今では、学校とも情報共有を頻繁に行われていますね。理解や協力が得られるようになった要因は何だと思えますか？

**甘利 MG:**一番大きかったのは保護者の声です。「学校では困っていないかもしれないが、家で困っているので助けてほしい」と保護者が担任の先生に相談したことがきっかけで、学校も協力してくれるようになりました。

### Q4 | 子どもたちにはどんな変容が？

**甘利 MG:**開所当時は、身なりを整えることや身体を清潔に保つことに関して意識の低い子が多かったです。拠点で入浴や洗濯、爪切りや歯磨き、トイレなどの支援を重ねることで、少しずつ意識付けができてきています。

**BG:**子どもたちは自身の力でできるようになったことも増えましたか？

**甘利 MG:**体を洗うのも歯磨きをするのもお母さん、顔を水につけられなくてシャンプーハットにゴーグルだったお子さんが、一人で入浴できるようになり、歯も磨けるようになりました。生活面に限らず、全体を通して前向きで積極的な姿勢が見られます。

### Q5 | これから拠点が目指す姿、在り方は？

**甘利 MG:**家庭や学校での困難や居づらさから生じる体験格差解消のため、体験活動の提供に最も力を入れていきたいです。

**BG:**今も多様な体験活動を提供されていますよね？

**甘利 MG:**はい。畑をお借りして農業体験、冬季に外部講師をお招きしてしめ縄体験、茶道体験、染物体験など実施しています。民間団体にお手伝いいただき、調理体験も行いました。地域の方々にもたくさんご協力いただいています。

**BG:**今後も継続して力を入れたいと考えるのはなぜですか？

**甘利 MG:**体験活動中に得られる成功体験から、「できる自分」を実感してほしいからです。そこから生じる自己肯定感を大切に、「生き抜く力」を養ってほしいです。



# 9 成果 before~after

## 事例 1 >>>> 子ども(利用者)



学習習慣が身についておらず、学習への嫌悪感を示し、集中力が持続しない日々。

- 楽しみながらできる学習アプリを活用。
- 一人一人に合わせたドリルやプリントを用意。
- 学校のテストの結果を確認し、できていない所は反復学習。良い結果の時には大いに称賛!
- 家庭・学校と情報共有。



学習継続時間が少しずつ長くなり集中して取り組めることが多くなった。学校からの宿題が多い時には、自分で考えて自由遊びの時間に自主的に学習を進めるようになった!

## 事例 2 >>>> 保護者

仕事と子育てに追われ、日々の忙しさで心身ともに余裕がない…

「わが子との会話が楽しくなった」「拠点で見せるわが子の姿に感動した」との声が聞かれた!

## 事例 3 >>>> 学校

リーフレットを持って各学校を訪れたが反応は様々。全く関心を示さないことも…

「子どもたちが大変お世話になっています」と各学校から声をかけられるように!問題行動がある子どものケース会議に参加することもあり、拠点での様子を伝えながら学校の先生方と子どもの成長について話し合う機会が増えた。

## 事例 4 >>>> 子ども(利用者)

入所当時は、髪の毛や身なりが乱れていて唇や手がガサガサだった。

爪を切り、手や唇にはクリームを塗り、身だしなみを整えた。上級生やスタッフが髪の毛をとかしてしばってあげたり、前髪をピンで留めたりしてあげた。

自分から身だしなみに気をつけるようになり、おしゃれを楽しむようになった。

## 事例 5 >>>> 保護者

きちんと挨拶ができず、学校やスクールソーシャルワーカー(SSW)が話を進めてくれた。入所後も電話に出てもらえず、連絡が十分にとれないことも。

電話に対応してくれるようになり、学校やSSWを通さなくても連絡ができるようになった。毎月の利用希望表などはきちんと期限を守って提出してくれるように!

## 事例 6 >>>> 学校

開所当初は、学校との関わりはほぼ無し。学校から拠点への問い合わせや情報提供などは一切なかった。

校長会・教頭会で事業説明。学校に直接出向き、管理職や特別支援教育コーディネーターに施設概要説明や情報共有の依頼を行った。

学校訪問や電話連絡の際にスムーズにやり取りが可能に。下校時、拠点に学校職員が訪れ、様子を見たり、話をしたりする機会が増えるようになった。

# 10 関係者の声



子ども(利用者)

## 子ども

- 楽しかった活動がたくさんありすぎて、1番は決められない。(小3)
- 進んで学習したいと思うようになった。(小5)
- 学校の学力テストで点数が上がりました。(小4)
- ピアノをみんなに聞いてもらえるのが嬉しい。(中3)
- おふろがひとりではいれるようになりました。(小1)
- ここに来ると、小説を書いても良いのが嬉しい。(中3)



拠点スタッフ

## スタッフ

- 保護者が子どもを理解してくれたことが嬉しかった。(拠点MG)
- 表情から自信が満ち溢れるようになり、明るくなった。(拠点スタッフ)
- 安心感と自己肯定感(ここにいていいんだ、今の自分でいいんだ、という感覚)が形成されてきたと感じる。(拠点スタッフ)
- 対人関係や来客に対しても笑顔で会話できるようになった。(拠点スタッフ)
- 衛生面、食事面が常時心配なくできるようになり、心が落ち着いているように感じる。(拠点スタッフ)
- 「子ども第三の居場所」の利用を開始した当初は自分勝手な行動が目立ったが、次第に全体の行動にペースをあわせることができるようになってきた。(拠点MG)
- 「どっちでもいい」と言っていた子が、「〇〇がしたい」と自分の意思をはっきり伝えられるようになった。(拠点MG)
- 最初はスタッフがつきっきりだった子が、4・5年生になると何でも自分でできるようになりました。今は小さい子のリーダー的な存在になっていて、よかったなあと思った。(拠点スタッフ)



学校関係者

## 学校

- 「どうせ自分が悪いでしょ」と言わなくなってきたように思います。自分を否定的に見ないようになってきたと思います。自己肯定感が身に付いてきているように感じます。(学級担任)
- 安心できる場所として認知され、精神的な安定を図ることができたと考えます。(管理職)
- 学校以外にも、信用できる大人との出会いやふれあいがあることは、それだけで存在意義があると思います。(養護教諭)



保護者

## 保護者

- 娘も私も関わる方が増えたことで、心の支えができました。時々、先生方に甘えさせていただいて少しずつ前に進めています。ありがとうございます。(小5保護者)
- いろんな事を体験させていただけるので、子どもたちの将来が楽しみになります。(小2保護者)
- 毎朝なかなか起きてくれなかったのが、毎日「ココへ行く」という居場所ができたので、声をかけると布団から出るようになりました。(小4・中1保護者)
- 何よりも、子どもが「子ども第三の居場所」の先生がとっても大好きで信頼しています。私にとっても、子どものことを理解してくれている先生方に出会って心から感謝しています。「子ども第三の居場所」を選んで本当に良かったと心から感じています。(小1保護者)
- 以前利用していた学童は仕方なく行っている…という感じで、迎えに行ってもつまらなそうな表情でした。「子ども第三の居場所」では少人数なこともあり、家のようにくつろいで過ごせているようです。迎えの時間が遅くなくても嫌な表情はしないし、お弁当をもっての利用もできるようになりました。本人も、前のところより楽しいと言っています。(小4保護者)



自治体

## 自治体

- 家庭と学校の間、家庭でない学校でない親子の居場所として、「子ども第三の居場所」は活用ができると思います。(保健師)
- 家庭のニーズに応じた支援を展開していきやすいのではないかと考えます。(保健師)
- 子どもの居場所、親の相談できる場所、食育の場など、いろいろな側面を持った場所として、活用していける。(保健師)
- 「子ども第三の居場所」事業を実施したことで、児童個々に対する送迎や学びの支援など、幅広い支援方法を検討することができていると思います。(主管部署)
- 家庭の困難さは非常に見えにくいため、他の関係機関との共有を密に行うきっかけとなったと思います。(主管部署)
- 家庭の問題で里親や施設入所を検討するレベルの児童が、居場所を利用することで家庭での生活が継続できている。(主管部署)
- 子どもを支え、育てる社会が求められる中、子どもが自立するための準備の場となる「子ども第三の居場所」事業の意義は非常に大きいと感じます。(主管部署)

子どもたちが  
安心して過ごせる居場所を、  
日本全国に。



公益財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団  
〒105-8480 東京都港区虎ノ門3-4-10 虎ノ門35森ビル9階  
<https://www.bgf.or.jp/>

企画部企画課 tel:03-6402-5311 mail:kikaku@bgf.or.jp  
<https://www.bgf.or.jp/activity/daisan-ibasho/top.html>



Supported by  日本 THE NIPPON  
財団 FOUNDATION